保険毎日新聞「みちくさ保険物語」74

保険会社の写真帖一八千代生命

「老い」は、知らぬ間に忍び寄ってくる。還暦を過ぎて社会から貢献を求められるようになり、自分がまだ元気だと自覚する反面、このことを感知するようになった。数年前に妻から深々とお辞儀しないようにいわれた。自分では見えない頭頂に「老い」が忍び寄っていたのである。しかし、フィジカルに老いるのは致し方がない。人間として当たり前だ。しかしメンタルな「老い」に対しては抵抗できるのではないかと思う。

97 歳になる父がいる。2 年前に静岡の自宅から東京のサービス付き介護住宅に来てもらった。ケアマネージャが一人暮らしは限界であると判断したためだった。腰部を複雑骨折して自宅近くの特養にいる母を、シニアカーで見舞いに行くという生活だった。永年住み慣れた場所への執着があったが、母と一緒ならば東京に引っ越してもよいということで来てもらった。最初は、一人で買い物に出かけ、慣れない町で道に迷ったり、往来で転んだりしていたが、周囲の心配はよそに何事もなく過ごしていた。今年の年初に部屋の中で転んで大腿骨を骨折してから状況が急変した。96 歳だったが、健康的には大丈夫ということで手術。しばらく入院した後、3 ヶ月間リハビリ病院に転院した。その間、母が一人きりとなったのでサービス付き介護住宅を諦めて、車椅子の母には特養に移ってもらった。リハビリ病院を終えた父は、近くの老健に移り、そして最近、母と同じ特養に転院することが出来た。

この 1 年はめまぐるしく変化したが、父の「老い」は加速しているように思われる。骨折から車椅子というフィジカルな変化も大きいが、なによりも 2 年前、そして 1 年前よりも外部に対する関心が薄らいでいる。自宅にいた頃は、年相応の認知はあったが、贔屓の球団の成績とか囲碁などへの関心が大きかった。東京に引っ越して、あれほどまで好きだった球団の勝敗に関心を示さなくなった。健康で食欲が落ちていないので直ぐには心配していないが、100 歳を前にして生きる意欲が少しずつ衰えているようにみえる。

父は老いつつあるだけで、今は社会には何も貢献していない。しかし、私に「老いというもの」を人生の最後に教えてくれているようでありがたい。メンタルな「老い」は外部の世界への関心の希薄化から始まる。執着を持ち続け死ぬのは辛いことだから、人間にとってそれは一概に不幸なこととはいえない。しかし、人生 100 年時代にあっては、私はメンタルな「老い」に抵抗したいと思う。答えはわかった。世の中に執着することだ。しかしそのために何をしたらよいかということが問題である。

冬の朝、通勤途中に、背筋を伸ばして歩き、眼を見開いてみた。見える景色が違う。晴天に花火の跡のような雲が散らばっている。朝日を浴びて消えて行くのか、それともこれから大きな雲に成長して行くのか？こんなことを考えている自分を新たに見つめなおした。子どもの頃、雲をみるだけで 1 時間でも過ごしていたことを。老いに抵抗するためには、「背筋を伸ばし、目を見開くこと」。眼ばかりでなく、鼻も、耳も開くとよい。耳を開くと鳥の鳴き声が聞こえてくる。私が住む武蔵野では、「ス、ピース、ピース、ピース」となくジジュウガラが多い、運がいいと「コッチャコ、コッチャコ」と鳴くコジュケイなども聞くこと

ができる。外への関心の第一歩は、五感を研ぎ澄ますことかもしれない。

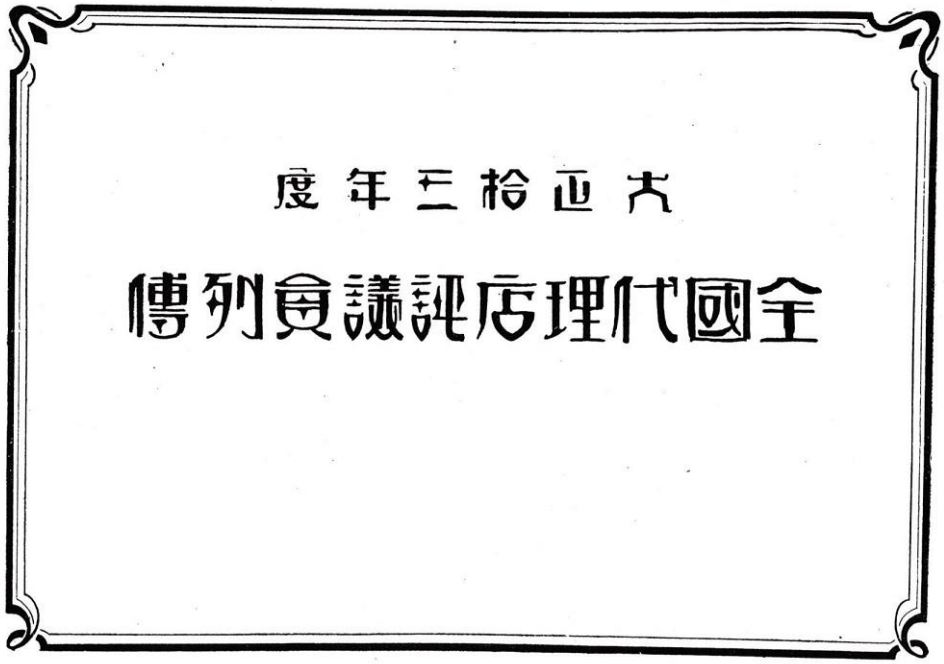
若い頃は、世の中は広く、時間は無限と思っていた。年をとるごとに、世間は狭く、残された時間も限り有るものだと感じる。若返るとは、若い頃の感覚を取り戻す、あるいは失わないということなのかもしれない。

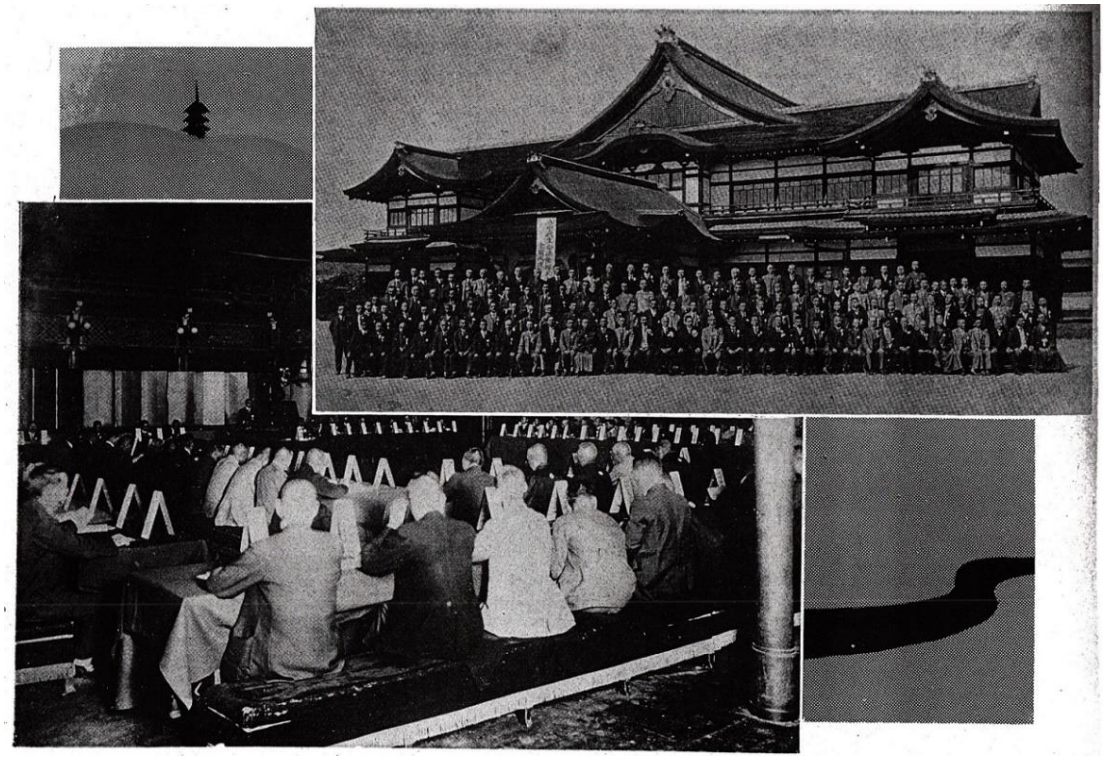
さて本日は、八千代生命『大正拾参年度全國代理店評議員会写真帳』を紹介する。「老い」の話題とは直接関係がないが、筆者の父の生まれた頃の写真帳である。写真帳自体は 17 頁にすぎないが、131 頁にのぼる「全國代理店評議員列伝」がついている（それぞれの内表紙を掲載）。分厚い写真帳だ。小原社長の「発刊の辞」から本史料の性格を述べておこう。「評議員制度」は、大正 11 年 1 月に樹立された「新制度新組織」ということであるが、「我社の第一線に立たるヽ代表的代理店」を集めたものであることから、優秀代理店を組織したものであると考えられる。大正 11 年度は 57 名により東京で第一回評議員会を開催し、大正 12 年度は 107 名で京都で第二回評議員会が開催された。そして大正 13 年度には「百三十一名の多数を推薦し、11 月 9 日より京都に第三回を開会」された。「我社は評議員会の業績に関して、少なからぬ喜悦を感じましたのを機会として、茲に第三回全國代理店評議員会写真帳を発刊いたし、是に大正 13 年度評議員諸氏小伝を加えて、梧下に呈する事」にしたという。

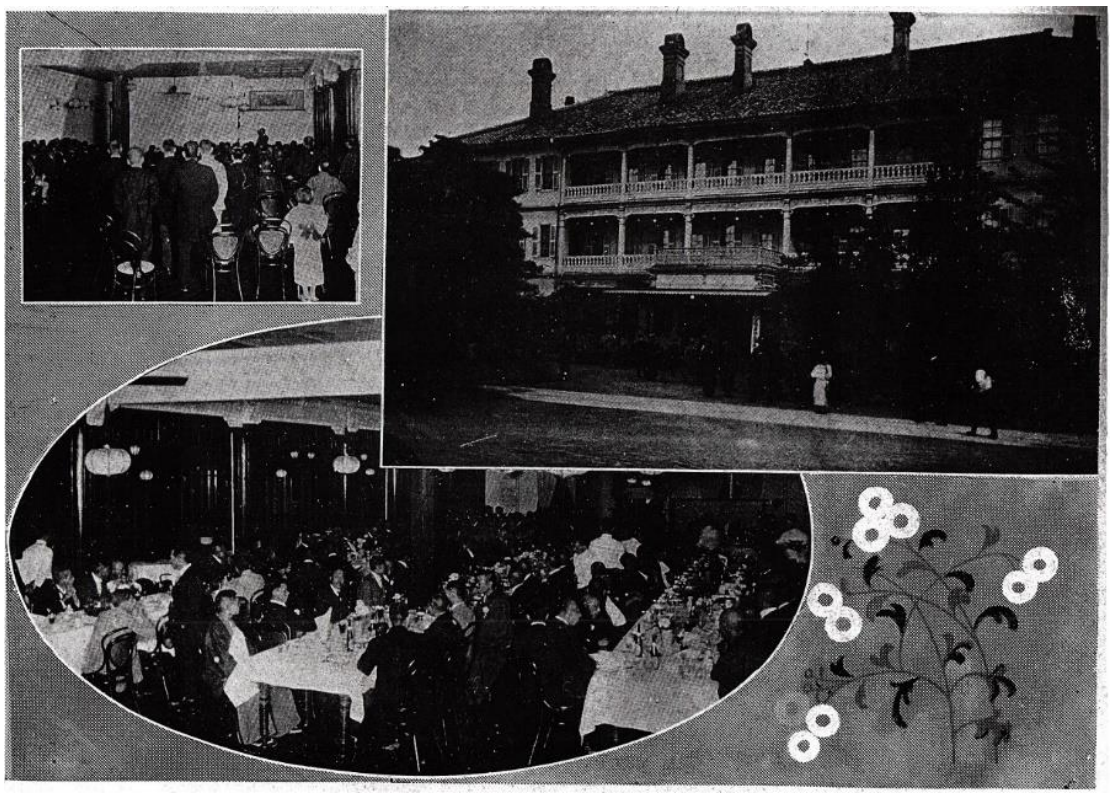
第三回全国代理店評議員会の旅程を写真から再構成してみよう。11 月 10 日に京都岡崎にあった京都市公会堂で総会が開催され、蹴上にある京都ホテルで晩餐会や映写会を楽しんだ（総会の会場である京都市公会堂と京都ホテルの画像を参照）。翌日は、宿舎の松吉旅館を自動車隊に乗り込んで京都見物を行なった。東山の知恩院を参詣したあと、清水寺の舞台を楽しみ、その後嵐山に移動して船で渡月橋などの風情を満喫した後、南座で観劇をし、夜は本家茶屋で楽しんだ（南座と本家茶屋は掲載画像を参照）。翌 11 日は、奈良に足を伸ばし、春日大社。三笠山、東大寺とまわって電車で京都駅に帰り解散となった（奈良の様子については掲載画像参照）。優秀代理店が、旅行で歓待されるという構図は、前々回紹介した日本徴兵保険と同じである。

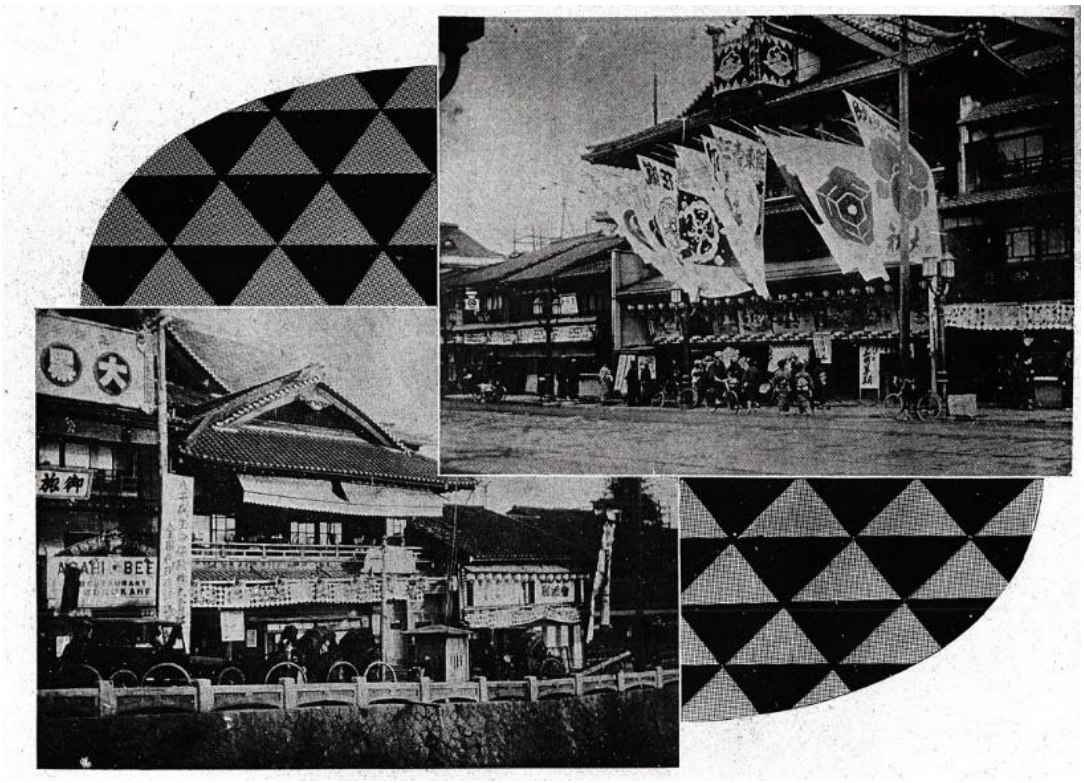
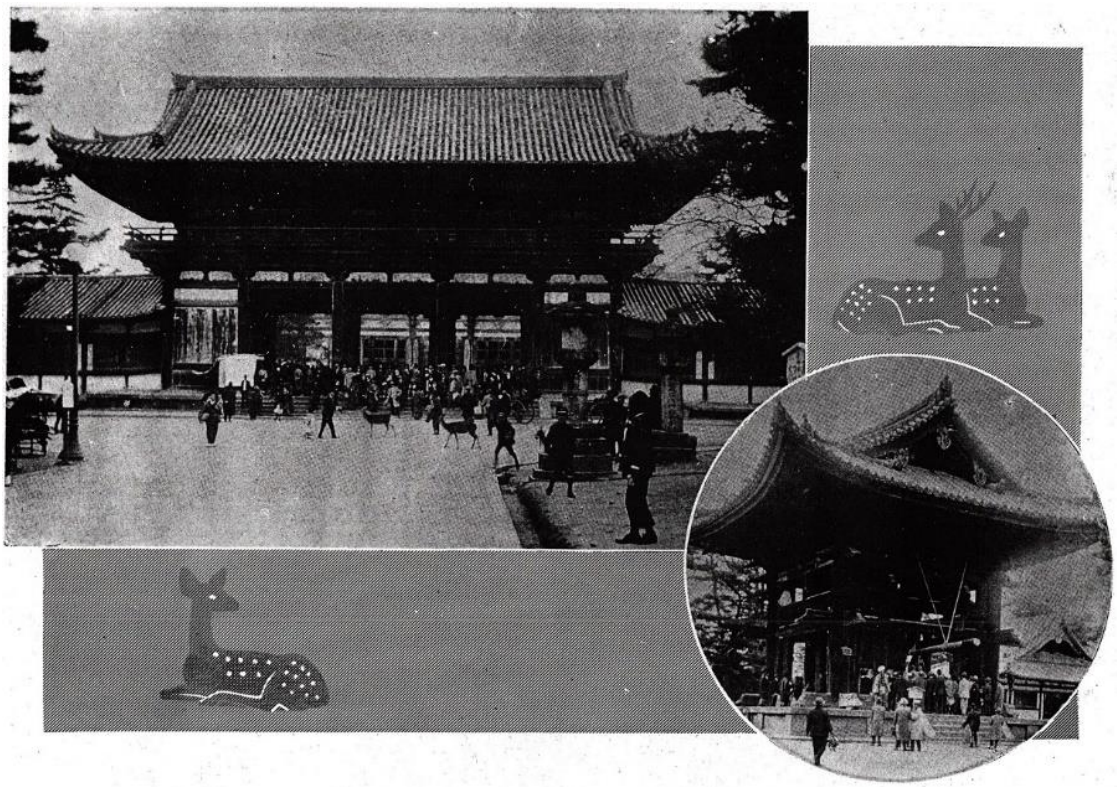
この写真集で異なるのは、「全国代理店評議員列伝」である。第三回協議会に参加した 131 名全員が写真とともに紹介されている。リストアップすると八千代生命の販売チャネルの実体が浮かび上がってくるが、ここではその分析は省略する。それぞれの評伝には、各地方における「名士ぶり」が紹介されており、評議員となった代理店主は大変誇らしい思いをしたと思われる。これがモチベーションとなって、保険募集に励んだ代理店は少なくないものと思われる。このことこそが、八千代生命がコストをかけて、分厚い写真集を作成した理由であった。

大正拾參年度
全國代理店評議員會
寫眞帖


大正拾三年度
全國代理店評議員列傳






大
御旅